

菊陽人 りさーち



ひろき ひろや
樋口 博哉くん
(12歳・光7町内)

- 趣味
歌うこと
- 将来の夢
お笑い芸人
- 今一番やりたいこと
テレビに出たい
- みんなに伝えたいこと
みんな大好き

掲載を希望する人は、はがきか電子メールに「氏名」「年齢」「住所」「連絡先(昼間)」を明記し、〒869-1192 菊陽町役場総合政策課 sogoseisaku@town.kikuyo.lg.jp までお送りください。
(注)掲載対象は、小学生以上で菊陽町に居住している人に限ります。親子、祖父母と孫など2人1組での掲載もできます。掲載が決まりましたら、こちらからご連絡します。



まつむら こうよう
松村 向陽くん
(11歳・三里木北)

- 趣味
将棋
- 将来の夢
建築会社の社長
- 今一番やりたいこと
友達と将棋をやりたい
- みんなに伝えたいこと
頑張ってください

人権のひろば

子どもの目、子どもの声
人権
作文シリーズ
【No.61】

問い合わせ
人権教育・啓発課
☎232-2113

◇印からの文章は、先生のコメントです。

「前を向いて」

3学期人権集会に参加して
武蔵ヶ丘北小学校 6年
工藤 若菜

私は、人権集会で菊陽町役場の米村さんの話を聞きました。

米村さんは、大学3年の時、交通事故で足を負傷されました。それから、車いすでの生活を送られています。米村さんの第一印象は「元気で堂々とされている人」でした。

今では堂々とされている米村さんですが、事故にあって足が動かないことを知ったときや、これからは車いすです生活しなければならぬと分かった時には、いづぶんまわりの人に当たりちらされていたそうです。

しかし、米村さんのすごいところは、車いす生活になってもつむかずに、自分でできることを探して、あきらめずに生きる強く思っているところだと思います。

また、車いす生活にならなければ気がつかないこととおっしゃいました。それは今でも「人に優しくしていたか」「まごころで接していたか」と自分を振り返るいい機会になったということです。私は米村さんの生き方に感動しました。これから、嫌なことやつらいことがあるかもしれないけれども、そんな時は米村さんの話を思い出して、私もいつか前を向いていこうと思

います。



▲笑顔で生きる、前を向いて

「バリフリーが整っていても、やはり人の力にかなうものはないと思います。何かお手伝いしましょうか」と声を掛けてみましよう。大切なのは心のバリフリーですね。

正しいことをしたのに一人にされていやだったこと

武蔵ヶ丘小学校 3年
外本 勇真

「ぼくが、ぼつ言を言った友だちに『そんなこと言ったらいかんよ』と、言ったら、『そんならいいよ』と、4対1になつてせめられました。

とてもいやだったので、なにかの学習の時間に、はつぴょうしてみんなを考えました。

はじめは、言った人たちは、言いわけをいっぱいしていました。ぼくは、とてもいやでした。

そのあと、正しいことを言っている人がはつ返されることや「やめて」と言ってもくり返されること、その人だけがじめられることのおかしさを勉強しました。それをゆるしているのは、ちゅういをするからだという勉強をしました。



▲信じ合えるなかま

人権ってなあに シリーズ⑤

歴史の裏方で、日本の文化や伝統を支えてきた人々

わが国に米作りが伝わると、人々は水の豊富な荒地を開墾し、自分の土地にしました。初めは誰の土地でもありませんから早い者勝ちです。力のある者が土地を耕し、所有して村ができていきました。古くからある村は、水の権利や山の権利を守るために決まり（おきて）を作り、氏神様を祭ったり寄り合いを開いたりして村人の結束を図りました。そこへ、全国を回って歩いてきた商人たちが村に入ってきて、新しい村ができていきました。決まり（おきて）ができた後にやってきた人々は「新参者」です。入会権も水利権も認められず、神社の祭りにも寄り合いにも参加できませんでした。こうして新しくできた村を地域ぐるみで排除するということが起きていきました。

そこで、新しい村をつくらした人々はさまざまな仕事を工夫することで社会を発展させていきました。村を回って刃物を研いだり直したり、歌や踊りで労働をねぎらったり、染め物や運送、医療など、さまざまな分野で社会を支え、技能を生かして優れた文化を生み出していきました。そしてたくましく生活していきました。

菊陽句会報

きくよう文芸

合唱の練習終へて春の星	井 子文	四季を詠み長き人生忘れ雪	宮川ユキエ
復興の進まぬ町や春の雪	財津 早雪	鶯やかくも美しく聞く扇	曾我 育代
来し方をおぼろに紡ぐ夜来雨	原野レイ子	庭いじり風の連れる沈丁香	曾我トモ子
春疾風波の逆立つ菊池川	力 幸子	白梅の香に惹かれゆく喫茶店	日高 妙子
菱餅や老女同士の餅談義	寺尾千代子	水車音のみの山里春浅し	紫藤 祥子
春水に鯉の尾びれの紅ほのか	高橋 孝子	氣立てよき嫁と孫いて雛飾る	村上 朋子
啓蟄や花柄スカート贖ひて	堀川 妙子	鯉撥ぬる池の気配に水ぬるむ	野口 令史
卒業式走った廊下を静々と	佐藤 健	湯豆腐や語りつくせぬ父母のこと	松橋 強
或る時は戦火の中に春も見ず	佐藤 節	嫁ぐ娘や広き座敷の別れ雛	藤本 純子
草餅を好みし人の三周忌	吉野 早苗	春愁やカード重なる長財布	佐藤 澄世
凍星のきらめき上空荒るるらし	井上久美子		

短歌会

やわらかき春の光に水仙は黄色増しゆくこの二日三日
水分と肥料が足らぬか春きゅうりビニールハウスに曲がり果多し
華やかに梅咲き満ちてわが庭も春の兆しに光かがよふ
たゆたゆと風に漂ふ花びらは水面に落ちて小川を流る
冬晴れの空を流るる白き雲草原を走る群羊の如し
みぞれ降る寒さに震え空仰ぐ東北地方も大雪と知る
白川に霞たなびく春の日に梅のつぼみがほころび始む
直売所の苺を買ひて帰る途香る車にはのぼのぼのとをり
朝の日を反して光るものあり歩き近づく駐車場の先に

今村 貞子
梅田 國雄
河北 幸一
菊川あさみ
佐藤せい子
中村トシエ
松岡富紀子
山川 カヅ
松本 東亜